

「天の瞳」(少年編) 灰谷健次郎 角川書店

倫太郎ーリエの登校拒否に立ち向かう

少林寺拳法について p.20f.

「少林寺拳法には、ひとつの大きな特徴がある。それを一言で言えば、自己を、いつも他者との関係の中でとらえるということだろうか。

タケやん、ヤマゴリラに「ジブンダケガ、シアワセニナレバ、ホカノヒトハ、シアワセニナラナクテモヨイ、トイウカンガエカタハ、マチガイデス.....」と言って抗議した。少林寺拳法の「半ばは人のしあわせを」

「あんちゃん」

少林寺拳法とは何か.....テニスや野球や相撲などは、ルールがあり、そのルールに従って試合が行われ、勝ち負けが決められます。スポーツには、良いところが沢山あります。しかし、勝つことが目的です。

そのため、相手が失敗すると、手をたたいて喜んだり、相手が負けることを願ったりします。

自分以外は、みな敵だ、という気持ちにもなります。少林寺拳法は、そのような考え方はしません。

少林寺拳法の業は、自分が強くなると同時に、相手にも強くなってもらうことを目的としています。

少林寺拳法は、宗門の行と言われます。これは金剛禅僧本山少林寺に伝えられる、体と心を鍛えるための修行の方法です。

少林寺拳法を修行して、自分の体と心を鍛え、頼りになる強い自分を作り、強い者が弱い者を助けながら、お互いに、しあわせな世の中をつくろうというものです。

「何のために少林寺拳法をならうか」

ーただ何となく、ついたり、けったりしていたのでは、体が少し丈夫になるくらいです。少林寺拳法をならう人は、目的を持ってならわなくてははいけません。その目的は二つあります。

「自己確立」と「自他きょう楽(享楽?)」ということです。

「自己確立」というのは、本当の強さを持った、頼りになる自分をつくることです。「自他きょう楽」というのは、自分も幸せになるように努力すると同時に、ほかの人の幸せも考える、ということです。

この二つの目的をもって少林寺拳法をならわなくてははいけません。

他者のことを考える、他者につながる、という考え方は、社会を見つめることであり、それは究極には、よりよい社会の創造ということになる。

それを、この「みどりの本」で、わかりやすい言葉で子どもに伝える努力をしている。四つの徳目がある。

「みんなが幸せで、楽しく暮らせる世の中をつくる」「争いのない世の中をつくる」「正しいことが正しいと通る世の中をつくる」「信頼で結ばれた世の中」

このために守るべき四つの生活規範がある。

「脚下照顧(きゃっかしょうこ)」「(先ず自分のあしもとを見つめることから始める。履き物をそろえましょう。他の人のものも。)

「合掌礼」(あいさつは、合掌礼でしましょう。お互いに拝み合う気持ちが大切)

「作務(さむ)」「(掃除はいやがらずにしましょう。先輩後輩もみんなが)

「服装」(清潔できちんとした服装をしましょう。髪の毛長いー練習の邪魔)

精神が鈍ければ、技の取得は難しい。ー少林寺拳法

あんちゃん(達郎)が保育園に勤めていたとき、保母との口争い (p.114)

「子どものどこが純真やねん」

「子どもは、大人のように汚れていないわ」

「おまえ、本気でそんなことを思うてるのか」

「そうじゃなかったら保育園に勤めることなんかできません」

「あああー」

「お前にいうといたるけどな、子どもが一番世間の垢も、大人の嫌な部分も、さっさと身につけよるねん。残酷で、嘘つきで、……」

「自分と一緒にせんといってください。子どもを信じない人が、保育園で働くなんて、許せない」

「お前が親になったら、子どもは不幸や。なるべく遅う結婚せえよ。」

倫太郎とじいちゃんの間答 (p.115)

「人に好き嫌いがあるのは仕方がないが、出合ったものは、それが人でも、ものでも、かけがえのない大事なものじゃ。お前がさっき、はじめは、ないと言っておった草の実をよく見ると、ひげがあった。出合いを大切にすると、見えなかったものが見えてきた。」

「好き嫌いが激しいと、これは嫌い、これも嫌いとせっかくの出合いを遠ざけてしまうから、見えるものでも見えなくなってしまう。」

「神様がお前のために祈ってくださったおかげがひとつ、そうしてできた出合いを倫太郎が大事にしたことがひとつ、相手もまた倫太郎を気にかけてくれたことがひとつ、そんなひとつひとつが重なって、今の倫太郎がある。」

強い者は弱い者をいじめたりはしない。本当に強い者は、弱い者にやさしさを示して、はじめてその資格を持つ。

ウエハラさん語録 (p.119)

ー先生という漢字は、先に生まれると書くけど、先に生まれた知恵だけでものをいうとったら、倫ちゃんらのやんちゃの知恵には、追いついていかんわな。ワシは、それ、わかるで。

ー魚には旬というものがあるやろ。人間の子オにも旬があるわな。子どものときには、子どものときしかできんことを、たっぷりやってきた奴が、味のある人間になれるっていうわけや。

殿村龍太郎 翼を持つシーラカンス、動く仕掛け、カラクリ、おもしろいおもちゃをつくっている (p.212)

「なかなかものを覚えられへん、すぐ忘れるからオレはダメやなんて思う必要はないよ。もの忘れが良いから助かっていると思うこと。世の中、あかんねん、あかんねんが多すぎる」

「おまえは喧嘩早いからあかん。お前は物事にだらしないからあかん。そんなことをいうかと思うと、お前は几帳面過ぎるからあかん、なんていいよるやろ。めちゃくちゃや」

「あかんねんやなくて、……そやからエエねんといわなあかんし、思わなあかん」

「あかんねんは、すべてエエねんに置き換えるとよろしい。けんか早いから、それだけ発散できてエエねん、とか、物事にだらしないから、まわりの者がぴりぴりせんでエエねんとか。そしたら人はみな、値打ちのあることがよくわかるやないか。そやろ。ボクは、そういうふうに、人間は風通しをよくせなあかんと思ってるけど、きみ、ボクの、その考え、どうですか？」

(p.279)

慧子(フランケン(満)の姉)

「学校の先生は靴をぬがせて下駄ばきにさせないというはなし。学校の先生は退屈というクツをはいてるでしょ。その上、窮屈というクツもはいている。そのくせ屁理屈ばかり言う」

「校長や教育委員会にだけ、ぺこぺこして卑屈。そういうふうにして屈折しているのがガッコの先生」

「退屈、窮屈、屁理屈、卑屈、屈折というクツは、みな、ぬがさなダメだと言ったのは、実は殿村さんなの。殿村さんにそんな話を聞かされて、わたしがそれを、あなたたちに紹介したというわけ」 学校の教師にとってきわめて厳しい批判

「天の瞳」少年編 灰谷健次郎 角川書店 1999.4/5 初版発行

倫太郎、満たち「中学生」になる。

倫太郎とミツル、学校のあり方(校則等)に反抗。

不良グループとの問題。倫太郎殴られる。

「倫ちゃんがそういうてくれたからオレもいうけど、誰でも分かる値打ちより、時間がかかって、それでわかる値打ちの方を大事にせなあかんと思うよ」(ミツル)

仕事が深ければ深いほど、いい仕事であればあるほど、人の心に満足と豊かさを与える、とじいちゃんはいっていたな、と倫太郎は思い出す。

小さな仕事、大きな仕事ということについても考えた。よく考えてみれば、はじめから大きな仕事などありはしないのだ。どんなに大きく見える仕事も、それはごく小さな仕事の結晶なのだ。

倫太郎の母「芽衣」と満の母「潤子」の会話

潤子「あの子は、あの子の考えを守ろうとして行動しているのだったら、たとえそれが世の中に受け入れられないものであっても、他人に迷惑をかけたり、他人を傷つけたりしない限り、親はその子の後ろ盾になってやりたい。そう思ったの」

「力愛不二（りきあいふに）」は少林寺拳法の特徴

愛や慈悲ばかりでなく理知や力も必要だという考え方
正義を伴わない力、愛や慈悲のない理知や力は暴力だが、それと同時に、力の伴わない正義、理知や力のない愛や慈悲は無力で、たんに飾り物にすぎないとする。

どんなに慈悲や愛が深くても、勇気と実行力がなければ、最初から慈悲も愛も持っていないと同じだと考えるわけだ。

もっとも非暴力という考え方も一方にあるから、少林寺拳法だけが唯一、善だと決めつけていうところの話ではない。

一言で言い聞かせても分からなければ、力に訴えてでもやめさせるだけの行動力と、改心すれば許すという寛容力が大切。

「子どもはそのかわいさだけで、一生分の親孝行をしてしまっている」

学校の成績について

「人には記憶力の他に、いろいろな能力があるでしょ。ものを造り出す創造力、あれこれ思いをめぐらす想像力、人の関係や自然と接するとき特に大切な感受性、その他、人には様々な能力がある」

ナンデスネの言葉「両親や先生の意見を全て、そっくりそのまま受け入れにくくなったということは、自分自身の考えが形作られてきている証拠です。これは”独り立ち”の第一歩にほかなりません」

少林寺拳法の開祖「宗道臣（そうどうしん）」

「技は磨かねばならない。しかし、磨いた技は使わないことが最も善である」